

Preliminary Report on the Dive Fishing Technique in Okinawa (2) : Culture and Techniques of Coral Reef Fishing at Tonoshiro, Ishigaki City

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004577

サンゴ礁海域における磯漁の実態調査中間報告 (2)

—石垣市登野城地区漁民の潜水漁法—

須 藤 健 一*

Preliminary Report on the Dive Fishing Technique in Okinawa (2)
—Culture and Techniques of Coral Reef
Fishing at Tonoshiro, Ishigaki City.—

Ken-ichi SUDO

The Yaeyama islands of the Ryukyus are located at the southern extreme of the Japanese archipelago. The shorelines of the islands are bordered by coral reefs, where various fishing techniques such as the use of nets, hand-lines and diving have been practiced.

This paper studies change in the use of techniques and their accompanying material culture. The diving activities of Tonoshiro district, Ishigaki City, are limited to within the barrier reefs, where octopus, lobster, seaweed and shellfish are exploited. Such species are categorized by local fishermen through their habitats, fishing seasons and other factors. A variety of traditional fishing gear has been developed.

- | | |
|-------------------|------------|
| I. はじめに | 1. タコ突漁 |
| II. 漁場 | 2. 貝類採集漁 |
| III. 漁業暦 | 3. 海藻類採集漁 |
| 1. 季節風と漁期 | 4. イカ漁 |
| 2. 海産生物の回游, 成長と漁期 | V. タコとりの1日 |
| 3. 潮の干満のサイクル | VI. おわりに |
| IV. 潜水漁法 | |

* 国立民族学博物館第3研究部

I. はじめに

本稿は、サンゴ礁の海域で営まれる漁撈活動、とりわけ伝統的な潜水漁法についての調査報告である。

沖縄の糸満漁民は、南西諸島をはじめ西南日本、南方はフィリピンやインドネシア方面にまで進出して、追い込み漁や潜水漁などの漁撈活動に従事してきた [羽原 1963: 159]。本稿の調査地、沖縄県石垣市登野城地区には、糸満系漁民の移住によって形成された“漁民社会”がある。石垣島への糸満漁民の移住は明治10年代に開始されるが、登野城地区に<アガリグ>¹⁾ (東小屋) と呼ばれる漁民部落が形成されたのは、明治30年代になってである [喜舎場 1975: 405; 牧野 1975: 346-48]。それ以後、糸満に限らず、宮古島、沖縄本島国頭地方、奄美諸島などからの来島者が続き、漁民部落として発展した。

糸満漁民に関する研究は、漁業経済史や家族内における分業体系などの視点から進められてきている [河上 1921; 河村 1939; 仲松 1944; 羽原 1963; 野口 1967, 1969]。それに比べ、漁撈活動における漁具、漁法などの技術的分野に関する研究は、近年にいたるまであまりとり上げられてこなかったといえよう [前川・上江洲 1974; 野口 1975; 口蔵 1977]。しかしながら、昭和40年代からは漁業の近代化が急激に

進み、追い込み漁をはじめ伝統的な潜水漁法は衰退の一途を辿る傾向が顕著になってきている。登野城地区においても、潜水漁法を営んできた漁民のなかから、沖合での一本釣り漁や延縄漁などへと漁法の転換を試みる人々が出現してきている。

本稿では、このような事態を考慮して、わずか2週間という調査日数ではあったが、潜水漁法の技術的側面に焦点をあてて記述することにする。ここでいう技術的側面とは、漁師の海の地形、海産生物の生態や習性に対する知識、漁場の選定

表1 登野城地区出身地別人口(1973年3月)
(牧野1975:26より)

出身地別	人口数	構成比
旧石垣市	2,335人	36.74%
宮古群島	1,659	26.1
竹富町	1,123	17.66
沖縄群島	663	10.43
旧大浜町	217	3.41
与那国町	216	3.41
本土	110	1.73
台湾	33	0.52
計	6,356人	100.00%

1) 方名の表記は< >を使用する。

方法、およびそれらに基づいてなされる漁法、用いられる漁具をさす。

調査は、昭和51年11月10日から25日にかけて、端信行（国立民族学博物館第三研究部）と共同でおこなった。ここであつかった基礎資料は、両者の観察と面接調査に基づいている。

なお、本報告は「日本の村落社会における物質文化の地域的比較研究」(昭和51年度文部省科学研究費補助金、一般研究A 代表者：梅棹忠夫)の報告の一部をなすものである。

Ⅱ. 漁 場

登野城地区で伝統的な潜水漁を営む漁師の活動海域は、石垣島と西表島のあいだに広がるサンゴ礁の堡礁 (barrier reef) で囲まれた内海である (図1参照)。この内海の水深は50 m にもおよぶところもあるが、漁場とされるのはせいぜい水深20 m まで

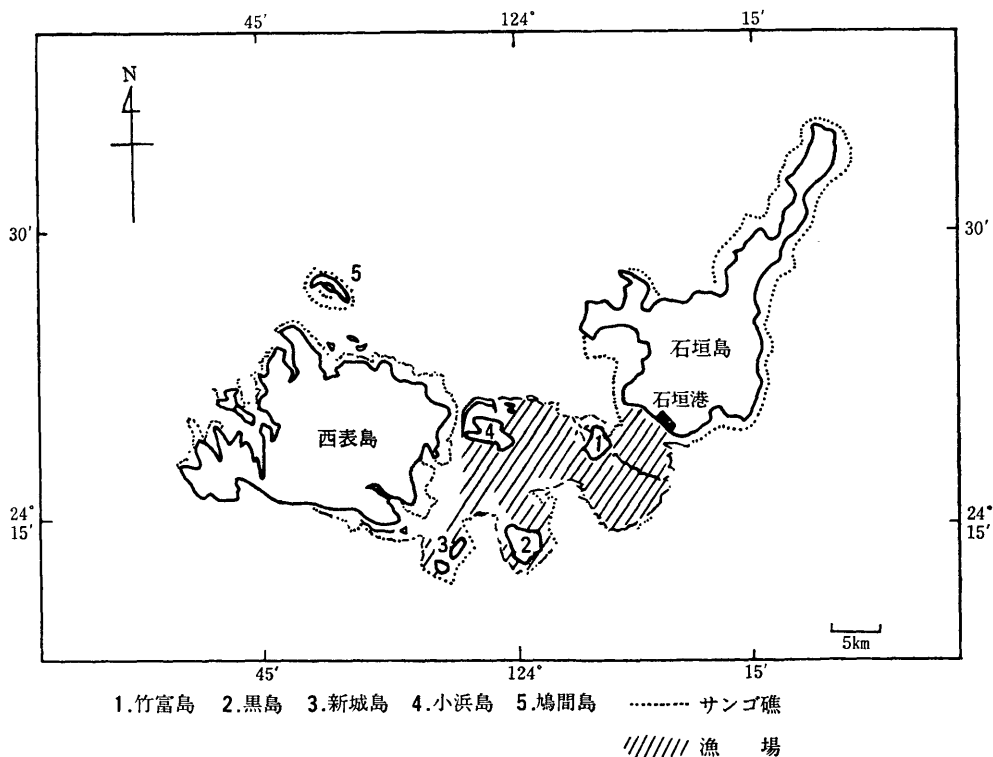
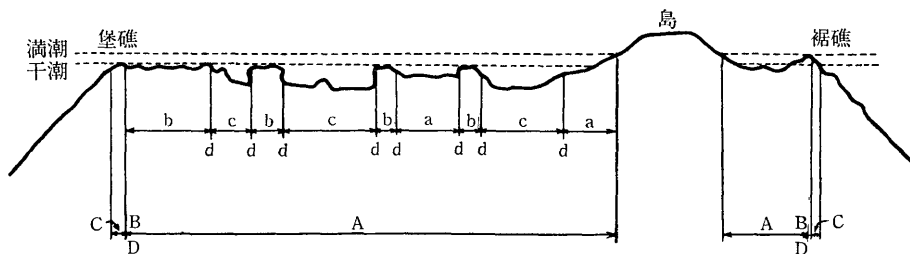


図1 活動海域

である。主に漁場とされるのは島の周囲に張り出した礁湖 (lagoon) および堡礁付近である²⁾。この海域はサンゴの発達が顕著で、魚介類や海藻類の生息に適しており、漁師から<クウェーミ>(海産物の豊富な海)と呼ばれている。また、「八重山の海はおそろしい、漁師を食わせてくれる」ということばからもうかがえるように、この内海は漁師にとって好漁場となっている。

漁師の活動海域は次のように分類されている。サンゴ礁が外洋と境界をなす堡礁のことは<ヒシ>, 外洋に向っておちこんでいる傾斜面 (reef slope) は<シンクチ>と呼ばれている。堡礁にある外洋と礁湖をつなぐ水路は、<クムリイー>と名付けられている。そして堡礁から島にかけての礁湖は<イノー>, 堡礁から礁湖に張り出した瀬や礁湖内に点在する瀬、すなわち礁原ないし礁湖礁 (reef flat) は<ハンタグワー>と呼ばれている。礁原から礁湖底にかけての傾斜面 (lagoon slope) は<アンナゴワー>と名付けられている。さらに、広い礁湖内で、礁原が隆起してなく、海底が砂地でおおわれた深い部分は<チブグワー>, それに対して、海岸に近かったり、比較的浅い部分は<ハーガイ>とそれぞれ区別されている。前者は干潮になっても水がたまり、水深4~5ヒロ(約9m)以上の個所とされている³⁾。

このように、漁師は漁場となるべき活動海域を堡礁<ヒシ>を境にして、外洋<シンクチ>と礁湖<イノー>に大別し、礁湖内を水深によって<チブグワー>と<ハー



海 域	A 礁 湖			B 堡礁 D 水路	C 外洋礁面
	a 干上り礁	b 礁湖礁 礁 原	c 礁湖溜		
地 方 名	A イ ノ ー			B ヒシ D クム リイー	シンクチ
	a ハーガイ	b ハンタグワー d アンナゴワー	c チブグワー		

図2 海域区分

2) サンゴ礁の海域に関する英語の用語は、[WIENS 1962] に基づく。

3) <チブグワー>, <ハーガイ>をここでは、礁湖溜, 干上り礁とそれぞれ表記する。

ガイ>とに細別している(図2参照)⁴⁾。

石垣島から西表島にかけての広大な礁湖で、登野城の漁師の活動範囲は、動力つきの<サバニ>で、片道の所要時間が、1~1.5時間以内に限定されている。その海域はほぼ、小浜島と新城島を結ぶ線より石垣島側であるが、とくに、竹富島や黒島周辺は複雑に隆起した礁原が広がっているために、主な漁場とされている。また、潜水による突漁<アナクジ>の場合、特定の地形をした海域が漁場とされ、漁師個々人が既に知っている岩礁を巡回するという点に漁場選定の特徴があるといえよう。

Ⅲ. 漁 業 暦

八重山諸島において海に関する1年は、旧暦(太陰暦)で数えられる。漁撈活動もそれに基づき、風位、潮の干満、海産動物の回游などの諸条件との関連で展開される。漁師は魚類の時期的な移動や生息地、潮のサイクル、季節風などについての知識を伝承的・経験的に得ている。これらの知識によって、漁法、漁期、漁場が決められるのであり、1年の漁業暦はそれらの諸要因を前提にして規定されてくるのである(図3, 表2参照)。

1. 季節風と漁期

漁師は漁期を風との関係で次のように把握している。旧暦2月に<ニンゲチカジ

表2 昭和50年度月別水揚げ高(石垣市役所水産課資料より)

月 別		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
漁 種 別													
タ	コ	2564	5536	1629	278	145	85	186	51	667	5395	5790	2050
イ	カ 類	178	13	35	9	12	2		51	1628	2087	1794	300
甲	イ カ	601						3294	2520	3438	5805	1804	450
ウ	ニ	852	833	1641	912	901	884	1058					
シ	コ ガイ	8368	6334	1762	3683	1050	5655	1575	1030	660	840	675	675
	クロチョウガイ	276				1464							
	マガキガイ								459	731	629	799	175
	タカセガイ								1037	595	1300	3040	750
	ヤコウガイ		623										1150
	イセエビ							610	158				
	カニ			99									
	モズク		1424										434, 676

(単位: kg)

4) 外洋を表わす方名について、口蔵 [1977: 316] は<シンクチ>を<アシ>と<ダイカイ>とに細分している。

魚種別	春			夏				冬					
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
タコ	[Solid black bar]												
イカ類				[Solid black bar]							[Solid black bar]		
コウイカ	[Solid black bar]							[Solid black bar]					
ウニ	[Solid black bar]												
シャコガイ	[Solid black bar]												
サラサバティ (高瀬貝)								[Solid black bar]					
ヤコウガイ	[Solid black bar]												
マガキガイ	[Solid black bar]							[Solid black bar]					
クロチョウガイ	[Solid black bar]												
モズク	[Solid black bar]											[Solid black bar]	
カイジンソウ				[Solid black bar]									
キリンサイ				[Solid black bar]									
ヒトエグサ				[Solid black bar]									

図3 漁業暦

マーイ>と呼ばれる北からの突風が吹く。この風は新暦の3月中旬に、朝ないでいても風向きが南から北へと急変し、1~2時間で天気が崩れて大しけになるため恐れられている。しかしこの風が吹き始めると漁師は春漁のシーズンの訪れを感じるといわれる。旧3月3日は<ハマオリ>の行事がおこなわれる。この日の干潮時間が最も長く、人々は午後から干上がった浅瀬づたいに<ヒシ>の先まで出かけて、貝拾いやアオノリ採りをする。旧4月に吹く風は<フチャーギン>といわれ、高い波を伴なう。旧5月からは<ヘーンカジ>(南風)に変わり、この風が強いと風下の島影になったところの波が高くなり漁に出られないが、夜はなぎの日が続く。旧5月4日の<ハーリー>行事が終り6月に入ると、「鼻の穴の小さい人は息もできない」といわれるほど、

<マグリ>(べたなぎ)の日が続く。このころから夏漁の時期で<アギャー>と呼ばれる伝統的な追い込み漁が最盛期をむかえる。

また、<ハチガチターチャ>といわれて、8月15夜の2回ある年は閏年で、<ユンジキ>(同じ月)とも呼ばれ、海の獲物が多い年だと漁師に喜ばれる。

<ミーニシ>(新しい北風)が吹き始める旧8月中旬になると夏漁のシーズンも終り、旧10月には出漁中に突然台風のとおりなときと同じようなうねりが起こる。この<トビナミ>(飛び波)の出現が冬漁への前ぶれとなる。冬季に吹く風は、時計の針と同じ<カジマーイ>(風廻り)で、朝方に南西の海上に白波が立つと、午後には西北の海が荒れて漁には出られない。11~3月は北風の吹く日が多く、この時期は礁湖外の漁業に適さず、底釣り、延縄を専門にする漁師が出漁できる日は1カ月のうち12~13日だといわれる。

以上でみたように漁師は1年の漁期を季節風と波を目安に3期に設定している。次にこれらの漁期が海産生物の回遊・成長とどのような関係にあるのかをみることにしよう。

2. 海産生物の回遊、成長と漁期

当海域で潜水漁法の捕獲対象となる獲物は、その生息状態によって定着性の強いものと移動性のものとに分けられる。前者には、タコ、エビ、ウニ、貝類、海藻類などが、後者には、イカと魚類が含まれる。イカのうち、季節的に礁湖内へ回遊してくるのはシロイカ(アオリイカ)とコウイカの2種である。シロイカは5月ころ礁湖に入って海底近くに産卵する。この小イカは7~9月ころには10-20cmぐらいに成長し、<クローイカ>と呼ばれて、夏漁の追い込み漁の捕獲対象となる。コウイカも同様に、11~3月にかけて、放卵すべき特定のサンゴを求めて礁湖内を遊泳する。冬漁はこのコウイカ突きが主要な漁となる。

このような回遊によるもののほかに、定着性のものでもウニやモズクなどのように、乱獲防止のために禁漁期間を指定されたものがある⁵⁾。上記以外の定着性の強い海産生物に関しては、1年中漁が可能となるが、漁師は1種類の獲物を周年専門に捕獲することはない。夏漁や冬漁の期間中、回遊してくる魚類の捕獲を専門にしている漁師でも、海上の状態や潮のサイクルを考慮して、定着性のタコ突漁やジャコ貝採集漁に従事することがある。

5) 禁漁期間は次のとおりである(1976年11月)。ウニ:11月1日~3月末日、モズク:8月1日~2月末日、カイジンソウ:4月1日~7月末日、キリンサイ:1月1日~7月末日、ヒトエグサ:7月1日~9月10日。

したがって、漁業暦は、漁師が移動性と定着性の捕獲対象物をどのように組み合わせるかによって決定されるともいえよう。つぎに、漁期と密接に関連する潮の干満についてみることにしよう。

3. 潮の干満のサイクル

漁師が把握している暦と潮の干満の関係について述べると、旧暦の1日と15日は大潮で潮の干満の差が最も大きく、回游性の魚類を捕獲するのに適した時期である。夏漁でイカの追い込みをすころの大潮のときは、午前10時前後が大干潮となるため、朝5時に出漁して昼までには帰る。イカは満潮のときは余り動かず、潮が引いたときによくとれる。それは引き潮のときに礁湖溜に集まるからである。

また、11月から3月にかけてコウイカ突漁の時期は大干潮が夜中になるため、その前後の数日間はいくデントウモグリ>（懐中電灯を用いる潜水漁）をくシンクチ>でおこなう。

これらに比べて、タコ突漁、ウニや貝類の採集漁は、潮の干満とはさほど関係なくなされる。そのため夏漁でイカの追い込みをする時期は、大潮と小潮のそれぞれ前後数日間は、追い込み漁とタコ突漁が1週間ごとにおこなわれる。

このように、潜水漁に従事する漁師は、各漁期にその日の潮の干満のサイクルを見て、漁の組みたてを決定する。

Ⅳ. 潜水漁法

<スモグリー>と呼ばれる伝統的な潜水漁は、捕獲の対象となる海産生物の種類によって多様な形態をとる。現在、石垣島の漁師が営んでいるものは、チームを組んでおこなう共同の追い込み漁（<チナカキヤー>、<アギヤー>）、敷網を用いるカツオのマキ餌漁（<ジャコトウエー>）から、個人でおこなう1本ヤスを用いる突漁（<アナクジー>）、さらに、貝類や海藻類の採集漁などである。

このうち、登野城地区の漁師は、5～6人でおこなう小規模な追い込み漁、タコやコウイカの突漁、ウニ、シャコガイ、モズクの採集漁などを専門としている。これらの漁に用いられる舟は、杉板を張り合わせた<サバニ>である。

この章では、潜水漁の実態を、魚類の習性と生息地、漁具、漁法に焦点をあてて記述する。

1. タコ突漁

潜水漁の捕獲対象とされる〈タクウ〉は、マダコ (*Octopus vulgaris*) である。登野城の漁師がタコ漁をする区域は、石垣島の南部から竹富島、小浜島、黒島にかけて広がる礁湖内や堡礁付近である。タコは岩礁の上部や側面にある穴に生息する習性をもつ。漁師はこの穴を探し出すことが最初の仕事となるが、広い海域には無数の穴があるわけで、それらのすべてにタコが入るとは限らない。

彼らは〈タクヌヤー〉(「タコの家」) と呼ばれるタコの入りそうな穴を経験的に知っており、それは岩礁のかっこう(形状)、岩礁のひだや穴の形、穴の中の様子、海藻類の生え具合などで見分けられるという。「良い」タコ穴の条件はつきにあげるようなものである。

- ① 周囲が砂地で、その中につき出ている岩礁。
- ② 入口が狭くて奥が広がっている穴。
- ③ 海水の出入りが良く「清潔」な穴。
- ④ 長い海藻類でおおわれてない岩礁。
- ⑤ とくに、まわりに新しい貝やカニなどの殻が散在している穴。

このうち、④と⑤に関しては、12月～2月頃にかけて顕著になるといわれる。

これらの知識によって見つけ出したタコ穴は覚えておかなければならない。タコの習性で、タコが入ったことのある穴には次々に別のタコが入る傾向がある。タコ穴の場所を覚えてさえいれば、定期的に見回らただけでタコを捕えることができるからである。この穴を確認する方法が〈ヤマアテグー〉(ヤマアテ) である。ヤマアテは岬、山、木、岩などの目標物を設定し、それらの相互関係で海上の自己の位置をはかり、目的個所を探りあてる技術である。タコ穴探しに用いられる目標物は3点を基準としてなされる⁶⁾。それらの点の設定のしかたは漁師によって異なり、たとえば石垣港に停泊中の船のマストに1点をあてたために、次にヤマアテをしたら船が出港してしまって場所がわからなくなったという例もある。また、潮の干満で海面の様子が変わるので、海上や海岸の岩を目標点に選んだときは、必ず岩と同じ位置関係にある陸地の目標物(木など)にも合わせておく。

漁師1人が知っているタコ穴は300以上にもおよぶが、ヤマアテの対象となるのは岩礁単位でなされる。特定の岩礁のタコ穴を1個記憶しておけば、その周辺のタコ穴

6) タコ突漁でとられるヤマアテは、外洋での底釣り漁におけるそれと比較すると、目標物を至近距離のものに設定する特徴がある。これは、活動範囲が礁湖内ということにもよるが、漁師が海底の地形を経験的に知っているからである。また、「ヤマアテ帳」などという、ヤマアテに関する一定の技術を伝達するための方法をとらなくても、個々人の知識で修得可能である。

はその穴との位置関係で探し出せる。そのため、タコ穴の数だけヤマアテの目標点を設定する必要はなく、中心となる穴を船上でおさえれば、あとは海中で岩礁の形状や海底の様子で近辺の穴がわかってくる。タコ穴は個人の占有とされ、他人に教えることはない。たとえ、親子・兄弟で出漁しても詳しくは教えず、個人の力で体得してゆく性質のものだといわれる。

使用される漁具は<イーグン>と呼ばれる1本ヤスである。これには刃先にかえしのあるものとないものがあり、前者が<カブイーグン>、後者が<シーマー>で、

いずれも金属製の刃に竹の把手が装着されている。タコ漁に用いられるのは<シーマー>で、全長は2~3mである。金属部の長さは約70cmで、手で曲げられるように柔らかくなっている⁷⁾。これは複雑な形の穴に差し込むための工夫で、上から覗いただけではタコの存在が確かめられない場合でも使用できる(図4参照)。

タコは岩礁やサンゴと同じ色をしていたり、穴から手や眼だけを出していたり、また穴に出口が何箇所かあったり、人間の眼をくらすことがある。しかし、どんな穴にいるタコでもヤスで刺されれば、ヤスにからみつき、ヤスを入れた穴の方向から逃げようとするために出てくる習性があるといわれる。そのとき、刺したヤスを引いてタ

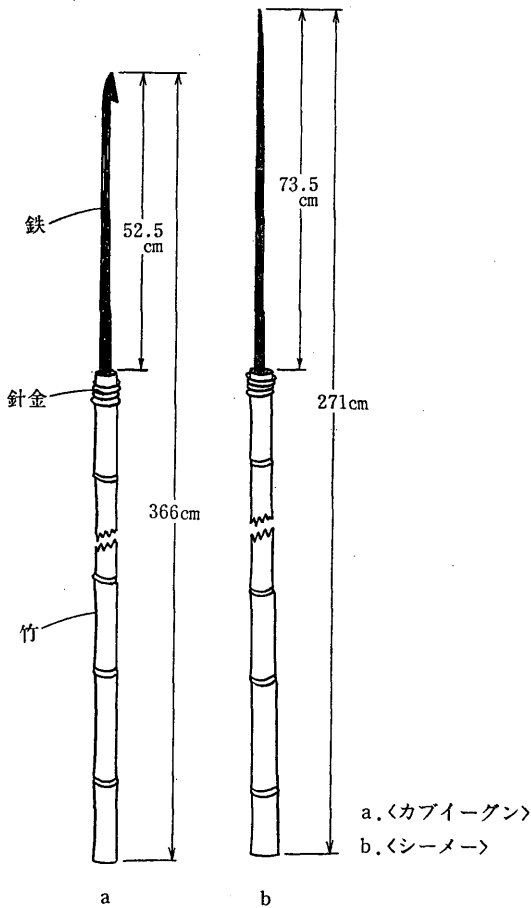


図4 <イーグン>

7) <カブイーグン>の長さは、2~3.8mと巾があり、使用される地形や捕獲対象物によって異なる。このヤスは、サンゴや溝に入った魚類を突いて引き出すためのもので、刃の部分の長さは<シーマー>に較べて短い(45~55cm)。把手の端にゴムの輪をつけて推進力を強める工夫をこらしたのもある。

コの頭の部分をつかんでタコの歯(トンビ)をヤスで碎きながら海上にあげ、眼と眼の間を歯でかみ切るとタコは逃げる気を失うという。この最後のトメが難しく、失敗すると顔や手に吸いつかれ、漁師は海中でタコと「格闘」する破目になる。ときには、くミズカガン(水中メガネ)を壊されたり、歯で傷つけられたりもする。

漁師はタコの生態や習性についていろいろ知っており、それらの知識に基づいて突漁をする。タコは寒くなると浅いところへ移動し敏感になる。それに反し、他の海生動物の動きがにぶくなるため、タコはエビ、カニ、小魚、貝などをエサとして捕えやすくなり、穴のまわりに食べ殻をたくさん散らしておくという。また冬場は、岩に付着している海藻が切れる時期でもあり、漁師にとってはタコ穴を見つけやすい。礁湖内のタコの腕はきれいに揃っているが、外洋から来たタコのは切れたものが多い。3月ころの春先になると交尾が始まり、オスとメスが一緒にいる場合が多い。このタコをくサガヤータクウといい、一度に2匹捕えられる。この場合、オスがオトリになってメスを逃そうとする習性があるという。タコは礁原の側面(くハンタグラー)に産卵し、その卵はブドウの房の形をしている。また、タコは台風などで海がしけた後は穴に良く入っている。

礁湖の外、4~5ヒロ(約9m)より深いところにいるタコは、巢(タコ穴)をもたないでエサを探して遊泳している。このタコは重さが4.5kgもあり大きい。礁湖内で獲れるタコの重さは3kgどまりである。

タコの値段は1年中ほぼ一定で、1斤(600g)が250円前後である。冬場は1日平均10~15匹の漁獲量である。

以上みたように、タコ漁は水深5m以内の礁湖を主な漁場としており、用いられる漁具は水中メガネと1本ヤスである。タコが礁湖内の岩礁に生息する習性から、この漁法において、タコ穴を発見し、記憶するという知識が、一定の漁獲を得るために不可欠な要因となっている。

マダコの他に捕獲対象となるタコにイイダコ(*Octopus ocellatus*)がある。くウムザナーと呼ばれるこのタコの漁法には3種類ある。干潮のとき、干上がった瀬にある直径2~3cmの穴を対象になされる。

- ① 2~3本のワラの基部に貝やカニの肉片をつけて穴に入れておく。タコが肉片に食いつけばワラが動き、タコのいることが判明する。穴にヤスを差し込んでタコを捕獲する。
- ② ニコチンをビンにつめ、水と混ぜて液体にする。タコのいる穴にそれを流し込むとタコが出て来る。そのタコを手でつかむ。満潮のときは、

- ③ チョウセンフデガイをテグスや細紐の先につけて、穴のまわりを引きまわすとタコが食いつく。それを海面にたぐり寄せて手でつかむ。

なお、これらのイイダゴ漁は潜水漁を専門とする漁師に限らず、農民によっても盛んになされる漁法である。

2. 貝類採集漁

礁原や堡礁、礁湖底での貝類採集漁は、シャコガイ、サラサバティ、ヤコウガイ、クロチョウガイなどが対象となる。このうち周年漁の対象となるのはシャコガイで、漁獲高においても貝類の大部分を占める（表2参照）。

1) シャコガイ

この海域で漁師によって分類されるシャコガイ（〈ギィーラ〉）は7種類にのぼる。このうち、主に採集対象となっているのは4種類で、〈ニーグゥ〉、〈ニーワー〉、〈スークワー〉、〈ウルギィーラ〉と呼ばれる。シャコガイは以前から潜水漁の主要な漁獲物となっていたが、本土復帰（1972年）以後、とくに需要が増加したといわれる。以前は礁湖内の水深4~5mのところでは採集されたが、現在は、深く潜る必要から〈フーカー〉（潜水器）を着けるようになった。漁師はシャコガイが1年に1cmぐらいいし大きくなるから、このままでは全滅してしまうだろうと心配している。

シャコガイは種類によって生息状態が異なる。

- ① 岩礁に基部から3/4ほど埋っているもの。〈ニーグゥ〉。
- ② 岩礁や砂地に基部のみが付着しているもの。〈ニーワー〉、〈スークワー〉、〈ウルギィーラ〉。

採集に用いられる漁具は、ゲンノー（小型ハンマー）とパール（鉄製のヘラ）である。①の採集には周囲の岩を砕くために、ゲンノーの打つ面が方形になっている。②の場合はパールが多用されたが、現在ではゲンノーを改良して用いている。ゲンノーの片方を平たくして、シャコガイの基部に当てて、テコの作用で岩礁からはがす（図5）。

海中での作業は労力が必要とされるために、ゲンノーにいろいろな工夫がこらされている。まず、その大きさは個人の体力（腕力）に合わせて決められる。大きければ大きいほど、海中での能率があがるといわれるが、腕力と同時に水抵抗が問題になる。打つ面を方形にするか円形にするかで、水抵抗が相当違い、後者の方が少ないが、反面岩を砕く場合は方形が適している。また、木製の把手の先端を、金属部中央に差し込むか、金属部に装着する個所をつけるかによっても、把手の強さが異なる。潜水器

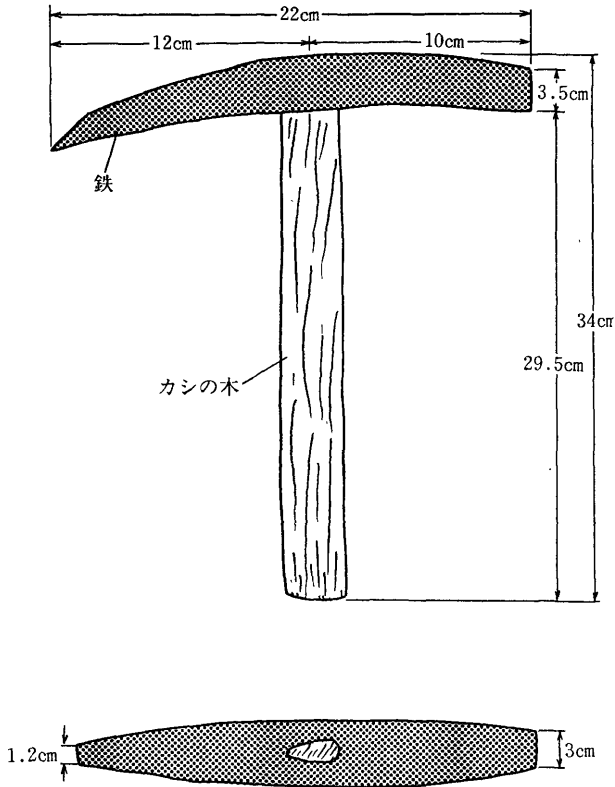


図5 ゲンノウ

をつける人とスモグリのの人とでは用いるゲンノーの大きさが異なり、前者の方が大きい。このように、シャコガイ採取に用いられる漁具は、貝の種類によって、ゲンノーとバール併用からゲンノー専用という具合に、漁師の選択によって変化してきている。

岩からはがした貝を入れるのに、直径 70 cm の竹製のカゴ (<バーキ>) が用いられる。古タイヤのチューブを利用したウキにこのカゴをのせ、綱で腰に結んで海中の作業中曳行する。殻のついたまま採集された貝をこの中に集め、船まで運ぶのである。港に帰って船を陸揚げしてから、貝の身を取り出す仕事が始まる。ナイフで貝柱を殻から切り放し、臓物を除去するこの仕事は、妻の役目とされている。

<ニーグゥ>は以前から薬用とされ、また<ウルギィーラ>は殻が基石の材料用に多く採られていた。現在では、ビン詰め塩カラや砂糖漬けの加工技術が発達したために、全種類が同じ値段で取り引きされる。シャコガイは手のかかる作業のため、最近、専門に採集する人はいなくなったといわれる。

シャコガイは、1斤1,200円の値段がつけられている。

2) サラサバティ (高瀬貝)

<ソームン>ないしくチビトガヤー>と呼ばれ、堡礁の外縁部 (<シンクチ>) に生息している。小さい貝は礁湖内の礁原などにいるが、出荷対象にはならない。高瀬貝は戦前から昭和30年ころまでは、ボタンの原料として多く産出された。登野城に限らず八重山諸島の潜水漁を専門とする漁師は、船団を組んでフィリピン、インドネシア方面に採集に出かけていた。現在は装飾用や建材の材料として台湾に輸出されている。4~5ヒロの水深まで潜って手で採集している。

3) ヤコウガイ

<ヤクゲー>と呼ばれ、堡礁のおちこんだ岩肌に付着している。この貝が生息しているところは、緑色をおびた岩の周辺に決まっている。水深7~8ヒロで、スモグリでは難しく潜水器が用いられる。大きなものになると1kgもあり、殻も身も出荷される。生のままフタをとらなければならず、その方法はフタを紐で結び、紐の端におもりをつけて下に向けて下げる。数時間たつと巻貝状になっている殻の中から身が出てくる。殻も装飾品として価値があるためゆでたりはしない。身は1斤1,000円。

4) マガキガイ

<ピラジャー>と呼ばれ、礁湖の砂地に生息する。小型の金属製熊手で採集。ゆでて身を取り出し、身だけを出荷。陸揚げされた貝は海岸に臨時に作られた炉で、半分に切られたドラム缶を鍋代りにしてゆでられる。全長4~5cmの貝から針で身を取り出す作業は手間がかかり、家族総出でなされる。この貝が出荷されるようになったのはここ数年のことで、身だけでなく殻の利用についても検討されている段階である。漁師のなかでも採集が簡単なことから、ウニ漁のあとの冬場の漁としてこの貝の採集を専門にする者もでてきている。

5) クロチョウガイ

<ヒーシクゥ>と呼ばれ、礁湖や堡礁付近の礁原に付着している。生息区域がシャコガイやタコとほぼ同じために、それらの漁の副産物として採集される。漁具はシャコガイ採集用のゲンノーが用いられる。採集された貝は一定の量になるまで舟だまり近くの中中に生かしておき、真珠養殖の母貝として出荷される。

以上でみたように貝類採集漁においては、高瀬貝からシャコガイ、さらにマガキガイへという採集対象物の時代的推移が、まず特徴としてあげられる。この背景には八重山海域における海産資源の枯渇化という要因がある。同時に、漁場が浅海から深海へと拡大されるにつれて、スモグリから潜水器を着用するようになってきた。また、シャコガイ採集の盛期においては漁具である採貝具の改良も進められた。

いずれにせよ貝類の採集は、資源の枯渇化と新種類の開拓という方向に進む傾向がうかがわれる。

また、貝類の場合は出荷するまでに多くの人手を必要とする。たとえば、海中での採貝、陸揚げしてからの貝殻から身の剥離、臓物の除去という作業が伴うシャコガイの場合のように、家族（主に妻）の手助けを必要とする。

3. 海藻類採集漁

登野城地区の漁師が採集対象としてきた海藻は、モズク、キリンサイ、ヒトエグサ、カイジンソウである。現在、最も水揚げが多いのはモズクであるが、昭和30年ころまでは、キリンサイやカイジンソウの採集が盛んであった。当時、漁師は八重山群島の海域はいうにおよばず、南方（フィリピン、インドネシア方面）に船団を組んで出かけたといわれる。これらの海藻は高瀬貝、ヒロセガイとならんで、南方における主要な漁獲物となっていた。しかし、最近それらの用途が限定され、値段も引き合わなくなってきたために、出荷を対象に採集する漁師はいなくなった。黒島や小浜島では、農家の人々によって農閑期の副作業として採集されている。

それに対し、ここ10年間にモズクの需要が高まってきた。春漁の対象として、相当の漁獲高となっている。前にふれたように、海藻類はすべて禁漁期間が設定されている。

1) モズク

沖縄地域で採集されるモズクは<スーニ>と呼ばれ、別名リュウキュウフトモズクである。本土のより太くて柔らかいために需要が多いといわれる。3月1日に解禁され7月31日までが漁期となっているが、3～4月の2カ月間で八重山海域のモズクは採りつくされてしまう。

モズクは水深5m以内のサンゴ礁の岩、海藻のなかや砂地にはえる。ある場所には群生しており、潜って手ですくう。潜水漁法のなかで最も楽な仕事だといわれる。モズクのはえる場所は、大体決まっているため、採集箇所を記憶しておく必要がある。陸揚げされたモズクは、他の海藻などの混り物を除去し、1斗カンに塩漬けにして出荷される。値段は1カン2,500～3,000円である。

2) キリンサイ

<ブートゥ>と呼ばれ、カタメンキリンサイの1種類である。生きたサンゴにはつかず、潮の流れの激しくない、浅い砂地や岩の上にはえる。採藻の最盛期は夏（8～9月）。海中では赤褐色をしており、手袋をつけてひきちぎる。生のうちは柔らか

いが、船着場などのコンクリートの上で日干しにすると硬くなり、白色に変わる。

最近では黒島、鳩間島、小浜島などで養殖もなされている。漁期の前に、ホウシのついた石を移植したり、生きたサンゴを壊してホウシをつけたりして、繁殖の場所を作ってやる。ゼリーを固める菓子の原料、カンテン、ビール製造時の材料として用いられるが、専門の漁師には採算が合わず、農家の人々が農閑期を利用して採藻している。

3) ヒトエグサ

<アーサ> (海藻の総称) と呼ばれ、アオノリ的一种。干上がったサンゴ礁の岩に付着しており、全長 3~4 cm。1~4 月が採藻期で、潮が引いたときに指でつまむ。石垣島には少なく、竹富島、黒島、小浜島に多い。密集しているために採集しにくく、黒島では、年輩の女性が一日がかりで、小さいカゴに1杯ぐらいしかとれない。ムシロの上に広げ、天日で自然乾燥すると鮮やかな緑色になる。雨にあてると白い斑点ができて、味も落ちるといわれる。

お祝いの料理には欠かせない材料で、トーフとともにすまし汁の具として食用にされる。また、内地へはノリのつくだ煮の原料として出荷されている。

4) カイジンソウ

<ナチャーラ> と呼ばれ、浅い砂地にはえ、1本の根から上部は 40-50 cm の大きさに広がる。採藻期はとくになく、手袋をはめて採集する。以前は回虫除去の虫下しとして需要も多かったが、現在は自家用に各家でとられるだけで商品にはなっていない。

4. イカ漁

八重山の海域には、1年の決まった時期に礁湖や堡礁の近辺を遊泳するイカがいる。潜水漁法の捕獲対象とされるのは、シロイカとコウイカの2種類である。前者は外洋の水深 20 m 内外の岩礁の周辺を遊泳しているが、5~6月に礁湖に入って海底に放卵する。後者は産卵のために10~11月ころ礁湖に入ってくる。

1) シロイカ追い込み漁

シロイカ (アオリイカ) は産卵後1~2カ月で体長12~13cmに成長する。この小イカは<クワァーイカ> (小さいイカ) と呼ばれ、7月中旬になると50~100匹と群れになり、飛行機のような編体をくんで礁湖内を遊泳する。この群れを捕獲する漁法は<アギャー>といわれる伝統的な追い込み漁であるが、現在この方法でイカを捕獲する組は登野城地区に3組しかない。そのうちの1組の漁法を紹介することにしよう。

1 そうのくサバニ>に6名が乗りくみ、イカの群れを探す⁸⁾。イカは潮の流れにのって泳ぐために、潮の動くときが漁期として良い。とくに引き潮のころ、イカは海水のたくさんあるくチブグー>に集る習性がある。イカの群れを見つけると、潮の流れを考慮して、網を設置する場所を決める。5人が海水に飛び込み、1人が舟を操作して網を張る。舟を潮の流れでゆく前方に係留させ、イカの後方に回って、網の方向に追い込む。イカに限らず海の動物は海の経験が浅くて“弱い人”の方を襲って逃げようとするといわれる。そのため追い込みのときは必死になる。また追い込む人と人の間からも逃げようとするので、その間に小石を投げておどしながら輪をせばめてゆく。イカは潮の流れる方向に進む習性があるため、網にかかると難なく捕獲できる。しかし、この漁はイカとの知恵くらべのようなもので、イカのことを知らないと“バカにされる”という。

イカの追い込み漁は夏場の2カ月間におこなわれるが、その期間中、潮の干満の差の大きい大潮の前後3日間が最適である。この漁に従事する人々は、残りの日はタコ漁をするので、夏漁は追い込みとタコとりを1週間ごとに繰り返すことになる。くクワァーイカ>も9月ころになると20cmに成長し、くアカガイイカ>と呼ばれる。この時期になるとくミーニシ>が吹き始めて、追い込み漁も終りとなる。

追い込み漁による漁獲物の分配法は、くアミノモーキ>(網主分)、くフニヌモーキ>(舟主分)、参加員の配当分に3等分されるのが普通である。この組の場合は、長兄が舟と網(ナイロン製)を提供しているので、売り上げ金から燃料費を差し引いて、残りを8等分し、長兄が舟主分、網主分を加えて3人前、残りの各人が1人前ずつというふうに話し合いで分配している。10年前ぐらいまでは、5~6そうの舟と30~40人の参加による追い込み漁もおこなわれていたが、最近ではキョウダイで組まないと追い込み漁はうまくやってくけないといわれる。

2) コウイカ

コウイカは毎年礁湖内の特定の場所(テーブルサンゴ)に産卵する習性がある。そのため良い場所を知っている人は貯金箱を持っているようなもので、1匹12~13kgのイカを一日に5~6匹も捕獲する人もいるといわれる。放卵場所は個人の占有で絶対他人には教えない。出漁の際、誰かに跡をつけられていることが判ると、別の方向に行ってその場所をごまかす。漁期は11~3月ころまで続く。用いられる漁具は、くカブイーグン>と呼ばれる刃先にカエシのついたヤスである。刃の部分の長さ45~55cm、把手部は竹で全長2.5m内外である。

8) このくアギャー>のグループは、4人のキョウダイと彼らの2人のオイより構成される。

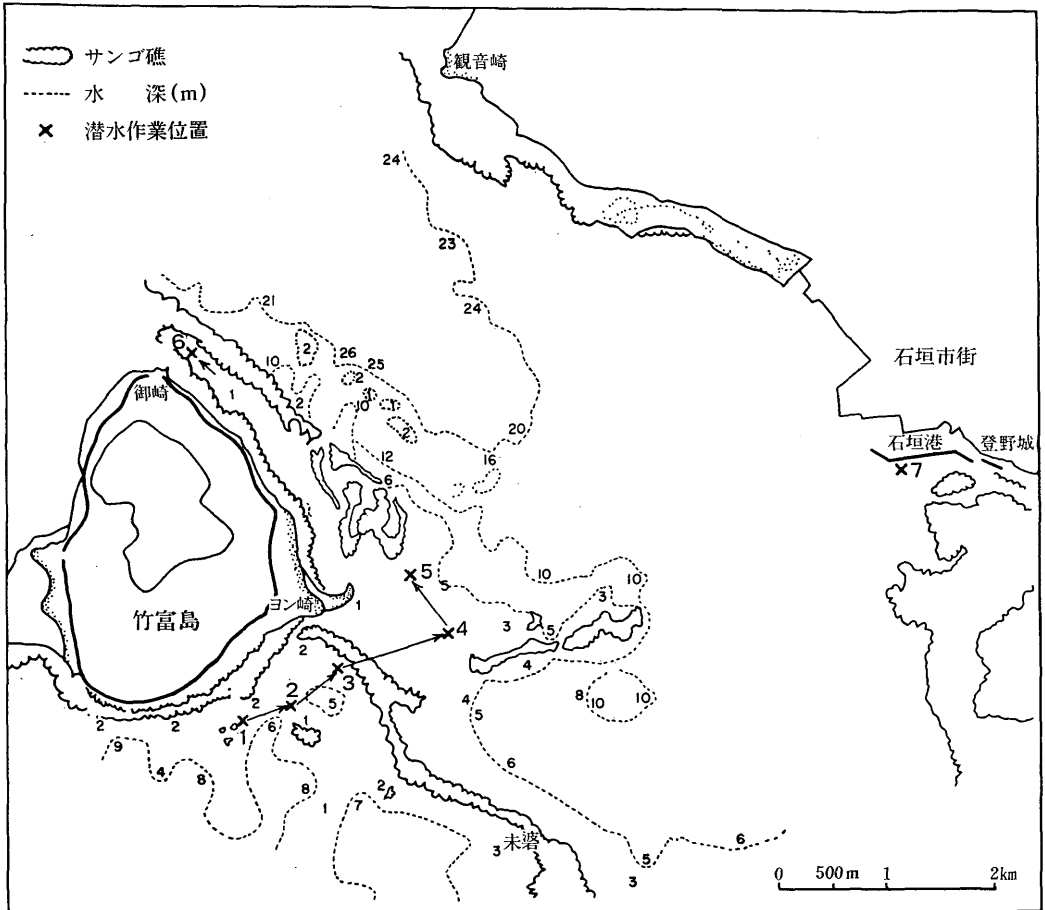


図6 タコ突漁の活動範囲

3) シロイカ釣り

シロイカが体長 20 cm ぐらいに成長する 8 月ころから、月夜の晩に礁湖で<イカビキ>がなされる。漁期は夏は 8~10 月、冬は 12~3 月にかけてである。舟のトモに 1 m ぐらいの<ツリゾー> (釣り棒) を立てて、その先から 7~8 ヒロ (約 12 m) のテグスをたらして先端に木製の<イカギー> (イカの擬似鉤) をつけて引く。擬似鉤には、エビ型と魚型の 2 種あり、目にビーズ玉を入れたり、彩色したりして工夫がこらされる。海面下 20 cm のあたりに沈むように引き回す。潮の動きのある大潮のときが良く、とくに満潮から干潮にかけての引潮時にイカが礁湖溜に集る。そこを舟を走らせて釣るのがコツダという。

イカ釣りの技術は、明治期に鹿児島から伝えられたといわれるが、擬似鉤を用いて

の漁法は戦後から発達した。イカ釣りは、潜水漁を営む漁師よりは、底釣りや延縄漁を専門とする漁師のあいだでおこなわれている。

以上でみたように潜水漁の捕獲対象となるイカは、追い込みによるシロイカと突漁によるコーイカである。コーイカは冬漁の主要な漁獲対象となっている。またシロイカは、登野城地区で現在、追い込み漁の唯一の対象とされている。

V. タコとりの1日

11月16日潜水漁法によるタコとりの実態を同行観察する機会を得た。そのときの様子を記述することにする(図6参照)。

船揚場に引きあげてある舟を海に降ろす作業から始まる。潮の干満の加減で、海面と船揚場の高さとの差が大きくて船の上げ降ろしが不可能になる時間がある。16日の朝は干潮にあたるため、舟は前夜のうちに降ろされていた。

午前7時45分出発。〈サバニ〉に動力をつけた舟で約30分後に最初の漁場に着く。竹富島の北東の沖合約300m。ここを選んだ理由は南西の風が強かったことと、その時間は潮が止まり、ここで漁をする人がいないからだという。ヤマアテをして舟の位置を決め、投錨。朝食をとる。漁師は皆、沖で朝食をとる習慣がある。この時期の海は、礁湖の外海ではうねりが大きいときでも、礁湖内は小さな波の日があるという。

8時30分、第1回目の潜水開始。ウェットスーツをつけた上に、12~13kgの鉛の帯状おもりを腰にしめ、足にヒレをはく。水中メガネのくもりを防ぐためにしょう油をガラス部分に塗る。海面に古タイヤのチューブをふくらませた浮きの上にカゴをのせ、ゲンノー、ナイフを入れる。その浮きに約10mの紐をつけて腰に結ぶ。右手に〈シーマー〉を持ち、1本の〈イーグン〉をカゴに突き刺す。準備が完了すると海中へ飛び込み、まず舟の周囲の岩礁にあるタコ穴をチェックする。往路は海岸に並行して獲物を探して舟から離れる。その行動距離は舟から約100mに及び、復路は往路の沖合を帰ってくる。全長約50cmのタコ1匹を捕獲し、第1回目の作業時間は40分。舟に上がり、竹富島の海岸と石垣島側の目標物を目あてに5分ばかり舟を移動させ投錨。

9時20分、第2回目の潜水作業にかかる。舟のすぐ側でタコを捕える。ヤスに刺したタコを海面に上げ、ヤスから外してタコの眼と眼の間を歯でかみ切る。その作業はタコの吹き出したスミで一面が黒くなった海面でおこなわれる。元気がなくなったタコをカゴの中に入れて、次の獲物を求めて泳ぐ。行動距離は舟から約50m、所要時間

35分で捕獲数2匹。第3回目は30分の作業でタコ1匹。このようにして竹富島の沖合いを徐々に西方へ移動し、午前中5回の潜水作業を試みる。1回の平均潜水作業時間は約35分、捕獲総数は5匹。11時30分に昼食。

12時5分、午後の作業を始める。午後の作業は小きざみに舟を動かしながら潜水を繰り返す。1回の作業数カ所のタコ穴を見回るだけである。竹富島の北西端まで達すると作業は終了(図中6の位置)。その時刻は1時30分で、それまでの潜水回数は約10回、捕獲数1匹である。

帰港の途中、今日の漁獲が少ないということで石垣港の防波堤で潜水を始める(図中7の位置)。舟を係留させ、ヤスのみを持って飛び込み、防波堤の波打ちぎわで作業をおこなう。小さいタコを3匹捕獲する。所要時間40分。

タコ突き漁の作業において、次のことが指摘される。午前中の潜水と午後のそれとでは活動範囲や作業内容が異なる。午前中は舟を投錨した位置から50~100mの範囲内のタコ穴をチェックするのに対し、午後は舟を移動させながら数箇所穴を重点的に見て回る。その日の漁獲が予期した量より少ないと、特定の場所での捕獲を試みる。また、用いられる漁具は<シーマー>1本のみである。

VI. お わ り に

サンゴ礁の海域で営まれる漁撈活動を、伝統的な潜水漁法にみられる技術的側面から考察してきた。今回の調査は短期間で、しかも共通語を使用しているデータ収集ということで、予備調査の域を出るものではない。そのためここでは、次の2点を指摘しておくにとどめたい。

第1は、当地域の漁撈活動が、漁期に制約のある捕獲対象物とそうでないものとの組み合わせ、および潮の干満のサイクルによって展開されているという点である。したがって、それらの海産生物の生息地や習性についての知識を修得することが一定の漁獲を得るための前提となっている。特定の生息地を記憶・発見する技術としてヤマアテが用いられる。生息地やヤマアテの技術は、各人の能力によって開発・修得される傾向が強く、個人の占有とされている。これは活動範囲が主として礁湖内に限られている点で、沖合いでの漁業におけるヤマアテの内容とは性格を異にする。

第2は、潜水漁法に用いられる漁具の種類およびその数が少ないという点である。これは捕獲対象物の種類数とも関連しているが、獲物と捕獲者との水中での距離を、潜水技術によって比較的自由に保てるからである。そのため、特殊な装置や補助具を

使用する必要がない。この点で、潜水漁法を営んでいる他の地域と比較検討することが今後の課題である。

謝 辞

この調査の実施にあたっては、短い期間とはいいながら、実に多くの方がたに教えをうけ、またご迷惑をかけた。とくに、調査にあたって適切なアドバイスを受けた関西学院大学の犬島襄二教授と石垣市出身の宮城信勇氏(沖縄電力株式会社常務取締役)には、心よりお礼を申し上げる。石垣市においては、沖縄県八重山支庁農林水産課をはじめ、石垣市役所水産課および企画課、八重山漁業協同組合、そして登野城地区の漁家のみなさんに、本当にお世話になった。いちいちお名前を記せないが、深謝する次第である。こうした様ざまな方にご迷惑をかけるのは、調査にはつきものことだけれども、そのことへのお礼の気持ちがこの小さな報告を書かせたともいえる。

文 献

- 羽原又吉
1963 『漂海民』 岩波書店。
- 具志堅宗広
1972 『原色 沖縄の魚』 琉球水産協会。
- 河上 肇
1911 「琉球糸満の個人主義的家族」『京都帝国大学法学会雑誌』6-9: 111-142。
- 河村只雄
1939 『南方文化の探求』 創元社。
- 喜舎場永珣
1975 『新訂増補 八重山歴史』 国書刊行会。
- 口蔵幸雄
1977 「漁撈活動における年齢による仕事の配分——沖縄県石垣市新川地区の漁民集団の場合」 渡辺仁責任編集『生態』(人類学講座編纂委員会編『人類学講座』12) 雄山閣出版, pp. 313-336。
- 前川守夫・上江洲均
1974 「糸満における漁撈」『沖縄県文化財調査報告書 糸満の民俗』 沖縄県教育委員会文化課, pp. 17-40。
- 牧野 清
1975 『登野城村の歴史と民俗』 自費出版。
- 仲松弥秀
1944 「糸満及び糸満漁夫の地理的研究」『地理学評論』20(2):15-39。
- 野口武徳
1967 「沖縄糸満女性のワタクサー」『東京都立大学社会人類学研究会報』4: pp. 38-40。
1969 「沖縄糸満婦人の経済生活——とくにワタクサー(私財)について」『成城文芸』44:11-35。
1975 「沖縄の伝統的船について」 大林太良編『日本古代文化の探究・船』 社会思想社, pp. 117-139。
- 沖縄県農林水産部
1975 『昭和49年沖縄の水産業』。

沖縄総合事務局農林水産部

1976 『昭和49年沖縄県漁業の動き』。

琉球大学社会人類学研究会

1977 『白保——八重山白保村落調査報告』 根元書房。

WIENS, H. J.

1962 *Atoll Environment and Ecology*. Yale University Press, New Haven and London.